

質疑應答

十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三
木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土
納豆	紅生姜	鮫佃煮	田夫	納豆	日本橋漬	煮豆	海苔佃煮	紅生姜	昆布佃煮	納豆	鮫佃煮	らつきよ
玉里葱	かぶ	葱馬鈴	玉干大根	薄青揚菜	か若ぶめ	豆薄腐揚	か人參	青干大根	葱うの花	志み	青か菜	馬若令
がんもどき馬鈴大煮込菜汁	牛肉大根	生揚げんまいかき玉汁	煎玉子さつま汁	牛肉葱	大根里芋生揚	玉子焼	カレーシチュウ	牛肉葱	馬鈴煮込したし物	蓮根里芋甘煮	牛肉葱	魚フライ
煮魚	むきみ入	焼魚	煮魚	白隠げん馬鈴甘煮	蓮人參甘酢	煮魚	焼魚紅大根	煎玉子	カツレツ	煮魚	五日野菜煮込	生卵
	豆腐油揚			椎茸かぶ豆腐白味噌汁				左方梳			油揚白す	刺身(特別給與)

質疑應答

(問) 結核患者ノ喀痰多量ノ者ニ分泌制限ノ目的ヲ以テ高張葡萄糖液ノ注射療法ヲ行ナワウカト思考中デスガ其ノ效果ノ有無ハ如何ノ者デセウカ。(静岡B、K、生)

(答) 近來葡萄糖ノ高張液注射ハ、色々ノ疾患特ニ熱性傳染病ニ用ヒラレテ相當ノ效果アルモノ、ヤウナ報告ハアリマスガ、コレヲ結核患者特ニ夫レノ分泌制限ノ目的ニ用ヒタ報告例ニハ殆ンド接シマセヌ、自分自身ニモ經驗ガアリマセヌノデコノ事ニ關シテハ何トモオ答ライタシカテマス、蔗糖ニツイテハ報告ガ少ナクアリマセヌカラ蛇足ナガラ附ケ加ヘテオキマス、即チ結核患者ノ蔗糖療法ハ一九一四年ロ、モナコ氏ガ蔗糖ヲ皮下ニ注射スル時ニハ(一)少量(二乃至二瓦)ナレバ血管ヲ擴張シ、分泌ヲ高ム、(三)大量(五瓦以上)ナレバ全クコレニ反ス。ト云フコトヲ研究發表シテコノ蔗糖ノ作用ヲ分泌多量ナル結核患者ニ應用シタニハジマツテ其ノ後多クノ人ガ後試ノ結果アルヒハ贊シアルヒハ效ナシト云ツテキマス、伊太利ヤ佛國デハ贊成者ガ多クアツタ由デス。我ガ國デモ兩三氏ノ實驗報告ガアツテ有

效ト云ハレテキマス、不幸私自身ノ少數實驗例デハ卓效ヲ認ムルコトハ出來マセンデシタガ。トニカク尙問題ニナツテキルコトデスカラ、糖液ノ製出法ト其ノ注射方法トニ充分ノ注意ヲ拂ツテ施行シタナラバ害ナキハ勿論アルヒハ面白イ結果ガ得ラレルカモ分ラヌト思ヒマス。(佐々虎雄)

(問) 痔瘻ト結核トノ關係ト其療法如何。(東京老醫生)

(答) 精シイ御答ハ中々困難デアリマスガ肛門周圍膿瘍(切開排膿後痔瘻トナリテ殘ルモノ)ヤ痔瘻ハ肺結核患者ニ多ク見ル合併症デ當療養所ノ患者三百餘ニ就テ調べタ結果ハ其二割強デ肺結核ノ發病前?ニ痔瘻ヲヤツタト言フ患者モ相當アリマス。

痔瘻ヲ見タラバ必ズ潛伏結核若シクハ現在肺ニ結核性變化ガアルモノトシテ充分ナル注意ヲ以テ全身治療ヲ行フコトガ必要デス。

療法ハ主トシテ外科的ニ行フコトハ御承知ノ通デスガ手術ノ程度ト肺ノ病勢トニ深ク注意シテ時機ヲ選ムノデ胸部ニ活動乃至活動ノ徵アル時ニハ強ヒテ刀ヲ取ルコトハ誤ト信ジマス。

非觀血的療法ハ全身療法ノ外局所ノ清潔ヲ計リ時々坐浴ヲ行ヒ其他後段小林君ノ御答スルヤウナ方法ノ外當所デハ

「ツァイス」ノ照射燈(Balenchungsspiegel)ヲ使用シテ見マシタ、分泌ノ減少乾燥皮膚ノ色素沈著等ハ割合著明ニ起リマスガ根治ニハ中々時ヲ要スルヤウデス。(村尾圭介)

(問) 結核性痔瘻ノ非觀血的療法ヲ問フ。(東京S、E、生)

(答) 結核性痔瘻ノ非觀血的療法ニ就キテハ前項村尾氏ノ説明モアル故此所ニハ唯鹽酸「ペブシン」溶液ノ注入ニヨリ排膿ヲ減少セシメ諸症狀ヲ輕快セシメ得ルコトヲ紹介ス。
處方「ペブシン」 一〇〇〇(メルク製純「ペブシン」)

鹽酸 一〇〇(藥局方鹽酸)

蒸餾水 一〇〇〇

右ノ溶液ノ一〇〇蚝ヲ瘻孔ニ注入ス注入時多少ノ疼痛アリ、注入ノ間歇ハ一週間又ハ十日ヲ適當トス本液ハ製造後二週間以上ヲ經過セザルヲ可トスル故ニ毎回製造スルヲ可トス尙詳細ハ

實驗醫報第八年第九十三號所載、癩痕竝ニ結核性瘻孔ノ「ペブシン」鹽酸療法、伊藤正雄氏論文參照。(小林吉人)

(問) 結核性ノ肋膜炎ヤ腹膜炎ノ患者ニ自家血清療法トシテ其滲出液ヲ皮下ニ注射スルハ危險ノナイモノデセウカ、私ハ該滲出液中ニ結核菌ノ存在スル事アリ得ルモノト信ジマスガ如何デセウカ。(静岡B、K、生)

(答) 結核性肋、腹膜炎ノ滲出液中ニ結核菌ノ存在スル事ハ勿論アリ得ル事デ從ツテ之レヲ皮下ニ注射スル際他ニ結核新病竈ヲ作ル危険ハ理論上絶無トハ申サレマセヌ、バツクマイステル氏ノ如キモコノ危険ノアル事ト奏效不確實トノ故ヲ以テ自家血清療法ハ結核性滲出液ノ際ニハ行ツテハナラヌト迄云ツテ居マス、然シ肋膜滲出液中結核菌ヲ證明シ得ル場合ハ甚ダ少ナク、ステヘリン氏ハ滲出液中ニ於ケル結核菌ハ甚ダ少數ナル場合多ク且ツ菌ノ毒力ハ著シク減弱サレ之ヲ健康「モルモット」ニ注射スルモカク少數弱毒ノ結核菌ニテハ動物ハ久シク健康状態ヲ維持スル事ヲ唱へ梅本博士ハ「モルモット」ニ強毒結核菌ヲ肋腔ニ注射シテ招來セシメタル滲出液中ニ於ケル結核菌ハ注射後比較的早く消失スル事ヲ實驗的ニ證明サレテ居マス、實際結核性ノ滲出液中ノ結核菌ハ少數デアツテ證明陰性ニ終ル場合ガ多イ事ハ爭フベカラザル事實デアリマス、尙モシ滲出液中ニ結核菌が存在セリトスレバソノ菌ハ勿論自然ニ淋巴道及ビ血行中ニ移行シ得ル筈デアルカラコノ際自家血清療法トシテ滲出液ノ少量ヲ皮下ニ注射シテモ其レガ爲ニ新病竈ヲ新ニ生ズルノ危険ヲ特ニ増大スルトハ考ヘラレマセヌ、自家血清療法ハギルベルト氏ノ唱道シテ以來内外多數ノ臨牀家ニ

ヨツテ試ミラレテ居リソノ治療上ノ效果如何ニ就テハ意見區々デ必ズシモ確實ノモノトハ申セマセヌケレドモ、ソノ施行ニ際シ滲出液中ノ結核菌ニヨル危険ハ顧慮シナクトモ好イト云フ事ニ殆ド一致シテ居ル様デアリマス。(柴田正名)